

よりよい著作権のあり方を求めて

——文学研究の視点から

人文学部教授 園 田 暁 子

4月に人文学部の英語学科に着任いたしました。九州大学で学生や日本学術振興会の特別研究員として12年程過ごした後、イギリスで1年の研究の機会を頂き、名古屋の中京大学と名古屋大学に9年間勤務、このたび福岡に戻ってまいりました。この10年の変化に驚いたり、変わらない部分に懐かしさを覚えながら、海のすがすがしさの感じられる福岡の魅力を改めて感じております。どうぞよろしくお願いいたします。

文学者と著作権の関係

ウェブを通じて作品や日々感じていることを誰もが発信することができ、文学的・芸術的作品を各自が印刷したり複製することが容易である今日、著作権をめぐる問題は私たちにとって非常に身近なものです。ここ10年程私は、著作権の歴史とそれぞれの時代に文学者たちが著作権法とどのように関わってきたかについての研究を行ってきました。法律が文学者や出版者、そして読者の意識を変えてきたことは確かですが、多くの文学者も著作権のあり方を変えようと働きかけ、それを何らかの形で法律に反映させてきました。著作権法は、創作活動にとってインフラストラクチャーの一つであると言えますが、その成立・発展過程における文学者と著作権法の相互作用と、そこに見られるダイナミズムにそれぞれの時代の特徴を読み取ることができます。ここではその一例としてイギリス・ロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワース(W. Wordsworth、1770-1850)をご紹介します。

ワーズワースは、「水仙」や「虹」、自伝的な『序曲』などで今日も広く知られていますが、イギリスで最も愛される詩人の一人であると言えます。そんな彼は晩年、著作権法の改正に積極的に関わり、そ

の努力は1842年の著作権法へと結びつきました。1842年の法律は、著作権の保護期間を出版から42年、もしくは著作者の死後7年までのいずれか長いほうへと延長しました。著作者が永久に自らの著作権を持つのが理想だと考えており、当初は著作者の死後60年までの保護を提案したワーズワースにとって、死後7年間という保護期間は不完全なものではありませんでした。しかしながら、自分の死後も作品が読み継がれることを望んだ彼にとって死後も著作権が保護されるということは大きな意味を持っていました。彼が著作権の問題に関心を持ち、法律の改定に向けて働きかけたのには、自分の死後も家族に自らの著作による収入を残したいという経済的な理由だけではなく、彼の詩人としての理想や文学論とも深く関わった様々な理由があったのです。

イギリスで著作権法が成立し、施行されたのは今から300年以上も前の1710年のことです。この法律は、当時の女王の名前に基づきアン法と呼ばれますが、これにより、出版から14年、もし14年経過した時点で著作者が存命中であればさらに14年の期間著作権が保護されることとなりました。今日のイギリスでは著作権の保護期間が、著作者の死後70年までとなっていることを考えればかなり短い保護期間ですが、これが著作者が著作権を持つことになった第一歩となりました。それまではといえば、著作権は、出版者のギルドであるステイショナーズ・カンパニーのメンバー、すなわち出版者が持つことがほとんどで、それは永久に続く権利（永代版權）として認識されていました。著作権法によって、出版者にとってはそれまで遺贈もできる永久の権利だったものが、期限付きとなったのです。その是非をめぐるいくつもの裁判が18世紀にはありましたが、1774年のドンルドソン対ベケットの判決により、コモン・ローに

よる永代版權は否定され、著作権とは議会制定法による期限付きの権利とされ、それがその後の方向性を決めたのです。

私有財産？公的財産？

ワーズワースが文筆活動を開始した1790年頃、著作権の保護期間はアン法に基づき、出版から最大28年間というものでした。印税制度に基づく出版というものがまだ一般的ではなかった当時、詩人をはじめとする文学者たちは著作権を一括で出版者に売ってしまう場合がほとんどでした。ちなみに、ワーズワースの友人サミュエル・テイラー・コールリッジ (S. T. Coleridge, 1772-1834) は、印税方式で出版し、出版によっていくら得られるかやきもきした結果、500ポンドを得るよりも、たとえ50ポンドであったとしても出版者が提示する最高値で著作権を売ってしまっ心ての平安を得るほうが、文筆家として好ましいと述べています。しかしながら、ワーズワースは、駆け出しの時代から、著作権を出版者に一括で売ってしまうことはせず、一定部数の出版に対する対価を得るという形で出版しました。

この二人の考え方には、当時の文筆家たちの典型的な態度が反映されていると言えます。アン法により著作者が自らの作品の著作権を持つことが認められ、18世紀を通じて、文筆により経済的に自立することが可能になる道が切り開かれてきましたが、以前として文筆家は作品により得られる収入についてとやかく言うべきではないという精神的風土は根強く残っていました。著作物は、人々の間に広く流通して初めてその真価を発揮するという考え方があり、創作の精神的・文化的価値が重視されてきた中、その経済的価値を主張することに、当時の文筆家はかなりの抵抗を感じていました。伝統的に、知識や真理というものは空気と同じように無料で万人に利用されるべきであるという理想というものがあ、それに対し、自らの作品の経済的権利をどう位置付けるべきかという問題は特に18世紀から19世紀の初め頃まで文学者たちを悩ませました。

ワーズワースにとっての著作権

1814年には、アン法が改正され、出版から28年、もしくは著作者の存命中のいずれか長いほうへと著

作権の保護期間が延長されましたが、これは、死後も著作権を保護されることが、正確なテキストの維持のためにも必要であると考えていたワーズワースにとっては不十分なものでした。

ワーズワースにとって著作権は、単なる経済的権利を意味するものではありませんでした。もちろん、彼の死後も家族や子孫に遺産を残したいという気持ちには強いものがありましたが、自分の作品を自らの分身であるとすら考えていた彼は、死後にも読まれるテキストによって、自分が人々の間に永遠に生き続けることができると考えていました。その際に読まれるテキストをコントロールすることができず、編集者によって自分の意志に反した形で印刷されたものが流通することは受け入れ難いことでもあったのです。また、1815年の『詩集』に収録されたエッセイで述べているように、彼は天才のなすべき仕事は今までなされていないことを成し遂げること、言い換えればオリジナリティのある作品を残すことであると考えていました。そして、そのようなオリジナリティのある作品は、その独自性のゆえに、正当な評価をすぐには受けにくく、詩人は自らの作品を十分に味わい、評価できるような趣味（テイスト）を持った読者を徐々に開拓していかねばならないと考えていました。それは、出版からしばらくはあまり収入を期待できないことを意味していました。彼の作品の売れ行きを見てみると、彼のこの理論を証明しているようなもので、通常500部刷られた作品が、15年経っても売り切れないことも多かったのです。例えば1814年に出版された詩集『逍遙 (The Excursion)』は出版から20年経った1834年の時点でも36部が売れ残っているという状況でした。彼の作品に対する評価が一般に高まり、ある程度の売り上げを期待できるようになったのは1830年代半ば以降、特に彼が桂冠詩人に就任した1843年以降のことです。

彼が著作権法の改正に関わり、実際に動き始めたのは1837年のことでした。著作権の保護期間を延長することは、文筆家たちが、その創作にも、また正当な評価を得るまでにも時間を要するより野心的で、文化的価値を持った作品を書くことへのインセンティブになりうると考えていました。著作者にとってより活動しやすい環境を整えたいという文化的関心も持って彼は著作権法の改正に取り組むことを決意し

ました。

著作権法案を国会に提出したのは、彼の友人で自らも文筆家であったトマス・ヌーン・タルフォード（T. N. Talfourd、1795-1854）でしたが、その法案は(1)イギリス国外で最初に出版された外国人の作品の著作権保護、(2)文学作品、版画、劇作、講演など、保護する対象により別々の法律であった著作権の一本化、(3)著作権の保護期間を著作者の死後60年までとすることなどを盛り込んだものでした。これは、当時としては非常に進んだものでしたが、そうであったがゆえに、この法案は成立に至るまで妥協を強いられるとともに、5年もの歳月を要しました。

今日、日本や世界中で議論され、クリエイティブ・コモンズ等、より柔軟な著作権保護のあり方が模索されていますが、もちろん著作権の保護期間は長ければよいというものではありません。当時から、議論の過程では、(1)著作権は独占の一部であり、現在の保護期間で十分であること、(2)著作権の保護期間が延長されることにより書籍の価格が上昇してしまうこと、(3)その結果、知識の普及が妨害され、国民にとって有害であること、(4)著作者やその遺族により有益な書籍の出版が差し控えられることに対する懸念が主張され、私的財産であると同時に公的な財産である著作物の性質というものを考慮して、著作権の保護期間というものとは定められてきました。著作権保護のあり方は非常に大きな問題ですが、私は著作権の歴史的研究を一つの手段として、文学作品も含む著作物と社会とのよりよい関係について考えたいと思っています。



なぜか 高電圧、雷、教育の世界へ

工学部教授 花 井 正 広

はじめに

この2015年4月に工学部電気工学科に赴任してきました。生まれは、きらきら光る雲母が取れたため吉良と言われた愛知県幡豆郡吉良町（現 西尾市）で、育ちは伊勢物語のかきつばたで有名な愛知県知立市です。高校生当時 IC を用いたカラーテレビが急速に普及し始めていた頃で、テレビを良く知りたくて名古屋大学工学部電気科に入りました。その後、いろいろな巡り合わせで高電圧の世界に入り、その結果、現在福岡の地にいます。その岐路に巡り合った方を含めてこれまでの研究内容を紹介いたします。

誘電体の世界へ

中学、高校時代はクラブ活動で軟式テニスをしていました。しかし、大学では学業に影響しない程度の練習時間で、しかも強豪であると紹介していたライフル射撃部に興味がわき入部しました。クラブは自由な雰囲気と講義の空いた時間に練習ができたので良かったのですが、大学対抗戦、中部大会、インカレと出場する競技会が多いのが玉に傷でした。

3年生後期の誘電体工学の1回目の講義を競技会遠征で出席しませんでした。このため講義を担当されていた家田正之教授に呼び出されました。指定された日時に恐る恐る先生の部屋に入りました。一見非常に怖そうな先生が、お話を始めると非常にやさしい先生であることが分かり、約30分のお話の最後には何か面白そうなので誘電体を扱う家田先生の研究室に入ろうと思っていました。

当時の家田先生の研究室は、不夜城とも呼ばれ、いつでも誰かが居る状態でした。その安心感からちょっとした時間があると昼夜時間を問わず研究室に行き実験をしていました。X線励起した電子を用いてポリエチレンの熱刺激電流を測定してキャリアトラップを検討する研究です。一方、本来の研究テーマで

は無くても興味があった実験もおこなっていました。例えば、誘電体工学で勉強した通り使用する電極金属で電流値が明らかに異なることや、違う種類のフィルムを2枚重ねて電流を測定すると整流効果があることも分かりました。この内容は、当時中国からの留学生で、後に偶然再会した時には中国電力技術研究所の技師長になっていた祭国雄さんの博士研究で大きく前進しました。

複合絶縁と高電圧の世界へ

修士2年のはじめ、複数の企業の方が研究室を訪ねてきてお話を伺いました。いろいろな企業の複数の方とお話すると企業のカラーが何となく分かってきます。中でも梅村時博さんは家田研究室出身で、常に家田先生からすごい人物であるとのうわさを聞いていたため興味がわき、梅村さんの自宅までお邪魔したりして企業における研究方法などのお話を懇切丁寧に聞かせていただきました。自分の雰囲気と合うと思ったのが梅村さんの所属する東芝でした。浜川崎工場にある研究所で高電圧技術グループがあり、ここでも材料の研究をしているとのことでしたので希望し1983年に入社しました。

当時は、電力需要の増大に対応するため地下変電所の需要が高くなっており、SF₆ガスを使用した不燃性の大容量変圧器の開発が急務でした。

このため、ガス絶縁変圧器の開発を担当することになり、変圧器に使用するPETを始めとする各種ポリマーフィルムの絶縁性能の評価、SF₆微小ガスギャップ、被覆ガスギャップ、並びに静電シールドの絶縁特性を解明した結果、330kV-400MVAの大容量のガス絶縁変圧器が製造可能になりました。

特に、当時は金属と2種類の絶縁物の境界が1点で会するいわゆるトリプルジャンクションの絶縁特性が分かっていませんでした。これを高精度のボー

ルベアリングを用いた被覆微小ガスギャップの破壊特性を通じて解明することができました。

規格と高電圧試験の世界へ

大容量ガス絶縁変圧器の開発が一段落した時に管理職になり、社外での活動が増えてきました。日本国内の各大学との共同研究を皮切りに、カナダ、米国、シンガポール、中国、スペインとの大学や研究機関との共同研究や技術交流を進めるようになりました。さらに、国際規格である IEC とそれに密接に関連する CIGRE（国際電力会議）の高電圧試験の日本代表委員になりました。この結果、ガス絶縁変圧器の開発をしている時には高電圧試験は絶縁構成の開発の手段にすぎませんでした、高電圧試験方法そのものについて深く考えるようになりました。

一方、試験方法だけでなく試験を実施する試験所も国際規格で規定されるようになり、高電圧・大電流試験を実施する試験所の認定制度が開始されました。このため、東芝も高電圧大電力試験所を作ることになりました。認定試験所にするに当たって、高電圧の測定精度の確保、運用組織の担保並びに規定の制定が重要な課題でしたが、約1年で認定取得できました。せっかく認定試験所に認定されたのだから社外の高電圧試験も受託しようということになり、高電圧試験所長として受注活動を本格的に開始しました。それまで技術活動一筋から急に営業活動もしなければならず、非常に戸惑いましたが、慣れてくると不思議なもので少しお話すると試験を委託する顧客かどうかすぐに分かるようになりました。

当時は風力発電機ブレードが雷の被害を受けていると問題になっていましたが、ブレード破損のプロセスが分かっておらず風力発電機のメーカ及びユーザが対策に苦慮している時期でした。ちょうど高知県からブレードの破損の原因究明の研究委託されていた高知工科大学の坂本東男教授の記事を見かけて訪問し、ブレードの研究を一緒にすることに合意しました。ブレードの破壊様相を見て、今までの経験からブレード内部の圧力が雷のエネルギーで高くなり破裂したのが原因とすぐに分かりましたので、その検証対策試験を行いました。このブレードの試験を皮切りに多数の社外試験を受注できました。

教育と基礎研究の世界へ

ブレードの研究に目途が立った頃、名古屋大学大久保仁教授から4年間の寄附研究部門教授のお話がありました。大久保先生は、東芝に入社した時の直接の上司であり、ガス絶縁変圧器の開発途中で名古屋大学の家田先生に引き抜かれて名古屋大学に異動されていました。寄附研究部門教授のお話があったときには時期が早いと考えて最初はお断りしましたが、何か因縁めいたものを感じ、最終的には興味もあったためお受けすることにしました。

名古屋大学では、企業ではできない下記に示す3つの基礎研究を中心に行いました。1つ目は、水を絶縁媒体に適用するものです。水は非常に溶解性に富むため、絶縁には適用しにくい材料です。しかし、不純物を除いた超純水は、抵抗率が半導体並みで、破壊電圧は絶縁油の半分程度と、環境低負荷の各種用途の絶縁に使用できる可能性を秘めています。これまでに、超純水の絶縁破壊は熱破壊であることを解明しました。2つ目は、部分放電伝播特性の解明と診断への応用です。絶縁破壊の前駆現象である部分放電（PD）からの UHF 帯域の電磁界の放射特性を測定し、部分放電としては1つの電流パルスでも実際には複数の放電が発生していることを明らかにしました。3つ目は、スマートグリッドとメンテナンスを融合した概念 IGMS の実現性検討の研究です。従来の方法に比べて信頼性を保ちつつ低コストで電力システムの運用ができることを明らかにしました。

この4年間で教育および基礎研究の重要性と面白さを知り、更に続けたいと考えていたところ、高電圧試験設備がある福岡大学に来ることができました。福岡大学では、下記の3つの基礎的な研究に挑戦したいと考えています。1つ目は、ブレードへの雷の影響において、絶縁物を雷が貫通するときに雷の何が影響しているのかを同定する研究です。2つ目は、水を絶縁媒体として適用するために、超純水に添加物を入れて破壊電圧を保ちつつ、抵抗率を向上させる研究です。3つ目は、センサ付き IC タグを用いた機器診断の研究です。

上記の新しい観点の研究活動を通して、学生に対して常に影響を与えていきたいと考えています。